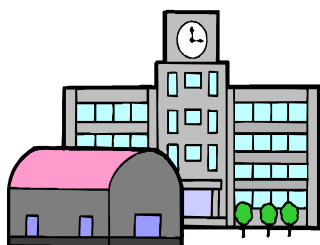


名古屋市の小学生・中学生・高等学校生の推移



平成 20 年 9 月に公表された「平成 20 年学校基本調査」の結果より、小学生、中学生及び高等学校生の推移について報告します。

なお、数値については、各年 5 月 1 日現在のものです。

1. 児童数・生徒数（小学生から高等学校生）

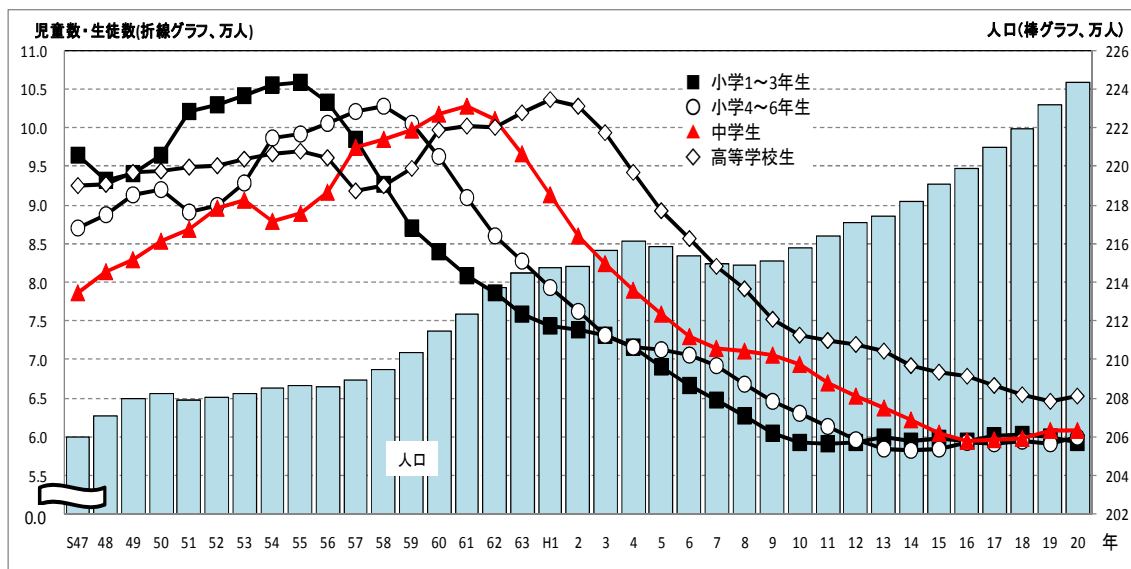
(1) 本市の児童数・生徒数の推移

人口が増加に転じた平成 10 年以降、徐々に安定推移となる

本市の小学生から高等学校生までの児童数・生徒数の推移をみると、小学校低学年では、「ひのえうま」にあたる昭和 41 年生まれの児童が入学した、昭和 48 年にいったん減少した後年々増加していたが、昭和 55 年にピークに達した後は減少に転じた。その後しばらく減少が続いたが、本市の人口が上昇に転じた平成 10 年頃からはほぼ 6 万人前後で推移している。

その他の児童・生徒数も、昭和 58 年から平成元年の間に、ほぼ 3 年間隔でピークに達した後減少に転じたが、小学校高学年及び中学生については 16 年以降ほぼ 6 万人前後で推移している。なお、高等学校生については、19 年まで減少を続けたが 20 年には前年を上回り、市外からの通学生も多いことから、平成 20 年現在で他の児童・生徒数より約 5 千人上回っている。（図 1）

図 1 本市の各児童数・生徒数及び人口



(2) 人口当たり児童数・生徒数の13大都市比較

平成10年以降、19年までは全ての都市で減少

小学生から高等学校生までの児童数・生徒数の合計数について、人口千人当たりの人数を13大都市間で比較してみると、平成10年以降19年までは全ての都市で減少しており、20年も横浜市及び大阪市以外の都市では引き続き減少している。

10年間で最も減少したのは札幌市で、人口千人当たり約26人減少し、平成10年には13大都市中6番目に多かったが、20年は10番目となっている。

一方最も減少数が少なかったのは川崎市で、10年間で約8人と唯一1桁台の減少にとどまっている。本市は約13人減と、減少の少ない順から6番目で、人数の多い順では、10年の8位から20年には6位となっている。

(表1、図2)

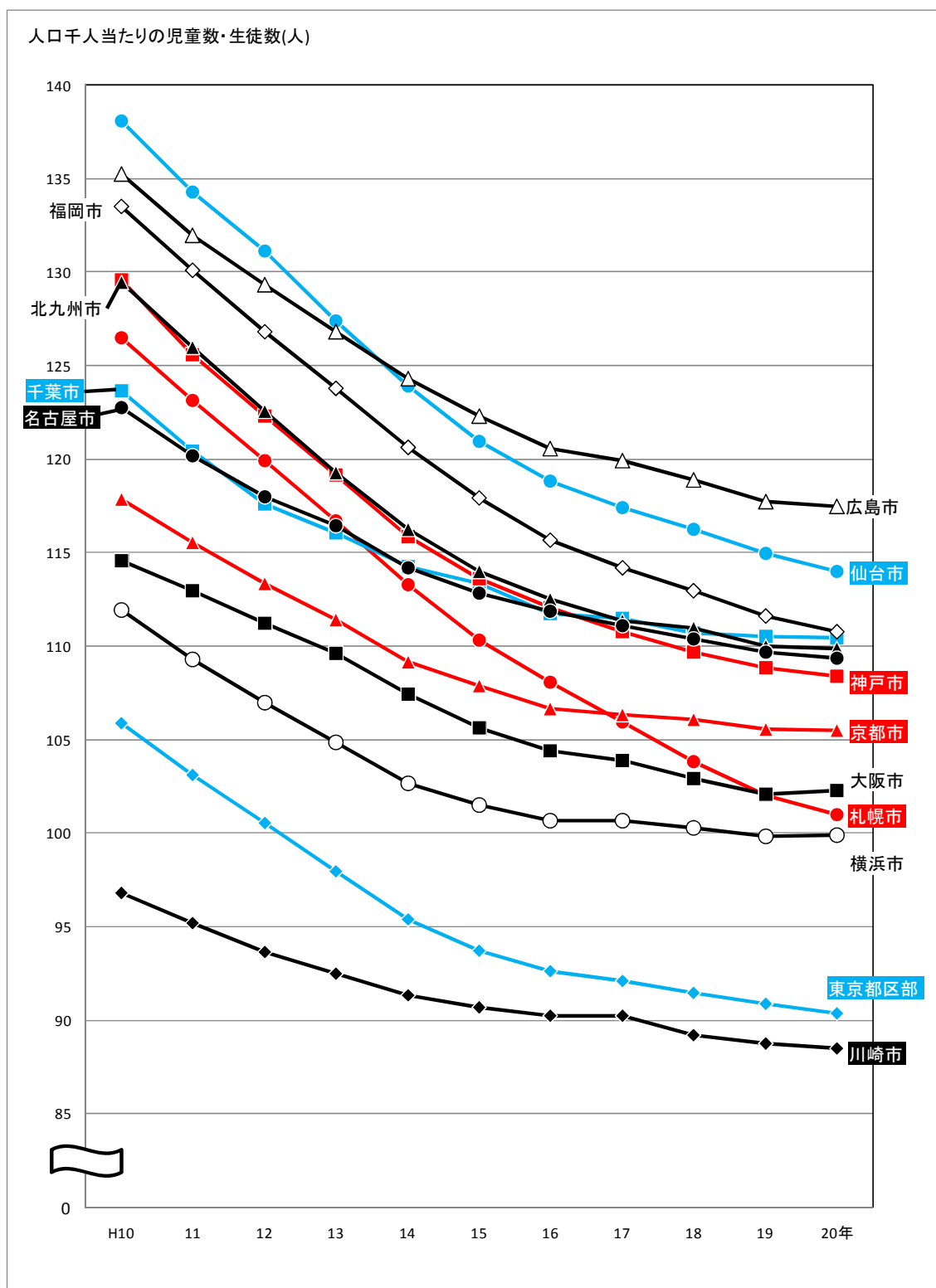
表1 人口当たりの小学生から高等学校生までの人数

小学生から高等学校生の人口千人当たりの人数(人)											
都市名	平成10年	11年	12年	13年	14年	15年	16年	17年	18年	19年	20年
札幌市	126.5	123.1	119.9	116.7	113.3	110.3	108.1	105.9	103.8	102.0	101.0
仙台市	138.1	134.3	131.1	127.4	123.9	120.9	118.8	117.4	116.2	114.9	114.0
千葉市	123.7	120.5	117.6	116.1	114.3	113.4	111.8	111.5	110.7	110.5	110.5
東京都区部	105.9	103.1	100.5	98.0	95.4	93.7	92.6	92.1	91.5	90.8	90.4
横浜市	111.9	109.3	107.0	104.8	102.7	101.5	100.7	100.7	100.2	99.9	99.9
川崎市	96.8	95.2	93.6	92.5	91.3	90.7	90.2	90.2	89.2	88.7	88.5
名古屋市	122.7	120.2	118.0	116.4	114.2	112.8	111.9	111.1	110.4	109.7	109.4
京都市	117.9	115.6	113.3	111.4	109.1	107.8	106.7	106.3	106.1	105.6	105.5
大阪市	114.6	112.9	111.2	109.6	107.4	105.6	104.4	103.9	102.9	102.1	102.2
神戸市	129.6	125.6	122.3	119.2	115.9	113.6	112.0	110.8	109.7	108.9	108.4
広島市	135.3	132.0	129.3	126.8	124.3	122.3	120.5	119.9	118.9	117.8	117.5
北九州市	129.5	126.0	122.6	119.3	116.2	114.0	112.5	111.3	111.0	110.0	109.9
福岡市	133.5	130.1	126.8	123.8	120.7	117.9	115.7	114.2	113.0	111.6	110.8
小学生から高等学校生の人口千人当たりの増減数(人)											
都市名	平成10～20年	対前年									
		平成11年	12年	13年	14年	15年	16年	17年	18年	19年	20年
札幌市	▲25.5	▲3.4	▲3.2	▲3.2	▲3.4	▲2.9	▲2.2	▲2.2	▲2.1	▲1.8	▲1.0
仙台市	▲24.1	▲3.8	▲3.1	▲3.8	▲3.4	▲3.0	▲2.1	▲1.4	▲1.2	▲1.3	▲0.9
千葉市	▲13.2	▲3.2	▲2.9	▲1.5	▲1.8	▲0.9	▲1.6	▲0.3	▲0.8	▲0.2	▲0.0
東京都区部	▲15.5	▲2.7	▲2.6	▲2.5	▲2.6	▲1.7	▲1.1	▲0.6	▲0.6	▲0.6	▲0.5
横浜市	▲12.0	▲2.6	▲2.4	▲2.1	▲2.2	▲1.2	▲0.8	▲0.0	▲0.4	▲0.4	0.1
川崎市	▲8.3	▲1.6	▲1.5	▲1.2	▲1.2	▲0.6	▲0.4	▲0.0	▲1.0	▲0.5	▲0.2
名古屋市	▲13.4	▲2.6	▲2.2	▲1.6	▲2.2	▲1.4	▲1.0	▲0.7	▲0.8	▲0.7	▲0.3
京都市	▲12.4	▲2.3	▲2.2	▲1.9	▲2.3	▲1.3	▲1.2	▲0.4	▲0.2	▲0.5	▲0.1
大阪市	▲12.3	▲1.7	▲1.7	▲1.6	▲2.2	▲1.8	▲1.3	▲0.5	▲0.9	▲0.9	0.2
神戸市	▲21.2	▲4.0	▲3.3	▲3.1	▲3.3	▲2.2	▲1.6	▲1.3	▲1.1	▲0.8	▲0.5
広島市	▲17.8	▲3.3	▲2.6	▲2.5	▲2.5	▲2.0	▲1.7	▲0.6	▲1.0	▲1.1	▲0.3
北九州市	▲19.6	▲3.5	▲3.4	▲3.3	▲3.1	▲2.2	▲1.5	▲1.2	▲0.4	▲1.0	▲0.1
福岡市	▲22.7	▲3.4	▲3.3	▲3.0	▲3.1	▲2.8	▲2.2	▲1.5	▲1.2	▲1.3	▲0.8

(注) 千人当たりの人数及び増減数については、別々に端数処理をしているため、双方の差が一致しない場合がある。

また、端数処理後の増減数が「0.0」の場合で、原数値がマイナスの場合は「▲」を付している。

図2 人口当たりの小学生から高等学校生までの人数



2. 1学級当たりの児童数・生徒数（小学生及び中学生）

(1) 本市の1学級当たりの児童数・生徒数の推移

小学校の1学級当たり児童数は、16年からの4年間で1.4人減少

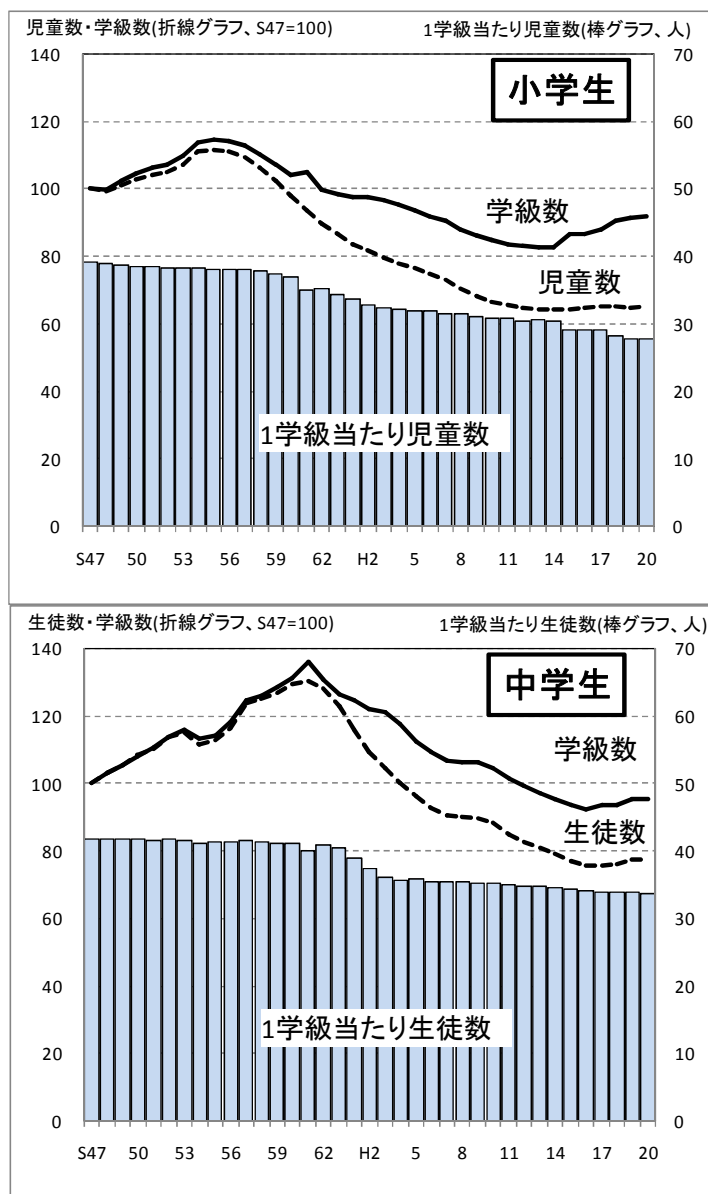
本市の小中学校の、学級当たりの児童数及び生徒数の推移をみると、小中学校とも昭和59年頃までは、児童・生徒数と学級数はほぼ同じような増減率で推移していたが、60年頃から学級数の増減率が比較的緩やかとなり、1学級当たりの児童・生徒数は徐々に減少している。

特に平成16年以降の小学校の学級数の増減率は、児童数の増減率をかなり上回っており、1学級当たりの児童数は20年までの4年間で1.4人減少した。

(表2、図3)

表2 図3 小・中学校の1学級当たり児童数・生徒数等

年	1学級当たり 児童・生徒数	
	小学校	中学校
昭和47年	39.2	41.8
昭和48年	39.0	41.8
昭和49年	38.6	41.8
昭和50年	38.4	41.8
昭和51年	38.4	41.6
昭和52年	38.4	41.7
昭和53年	38.3	41.5
昭和54年	38.3	41.1
昭和55年	38.2	41.3
昭和56年	38.1	41.2
昭和57年	38.0	41.5
昭和58年	37.8	41.4
昭和59年	37.3	41.1
昭和60年	37.0	41.1
昭和61年	35.0	40.0
昭和62年	35.3	41.0
昭和63年	34.4	40.5
平成元年	33.6	38.9
平成2年	32.9	37.4
平成3年	32.3	36.1
平成4年	32.2	35.7
平成5年	32.0	35.8
平成6年	31.9	35.4
平成7年	31.6	35.4
平成8年	31.4	35.4
平成9年	31.0	35.3
平成10年	30.8	35.2
平成11年	30.8	35.0
平成12年	30.5	34.8
平成13年	30.5	34.8
平成14年	30.4	34.6
平成15年	29.1	34.4
平成16年	29.2	34.2
平成17年	29.0	33.9
平成18年	28.2	34.0
平成19年	27.8	33.9
平成20年	27.8	33.8



(2) 小学校の1学級当たり児童数の13大都市比較

平成10年からの10年間では本市が最も減少

平成20年の小学校の1学級当たりの児童数を13大都市で比較すると、最も少ないのは京都市の26.4人、次いで仙台市の26.5人、大阪市の26.8人となっている。一方最も多いのは東京都区部で30.5人と唯一30人台となっている。

平成10年以降の推移をみると、10年前と比べ、東京都区部以外の都市では減少傾向が続いており、特に札幌市、京都市及び大阪市では10年連続の減少となっている。

10年間での減少数では本市が3.1人の減少と最も減少しており、少ない方からの順位も10年の11位から20年には6位となっている。次いで札幌市が3.0人、京都市及び広島市が2.7人と続いている。(表3、図4)

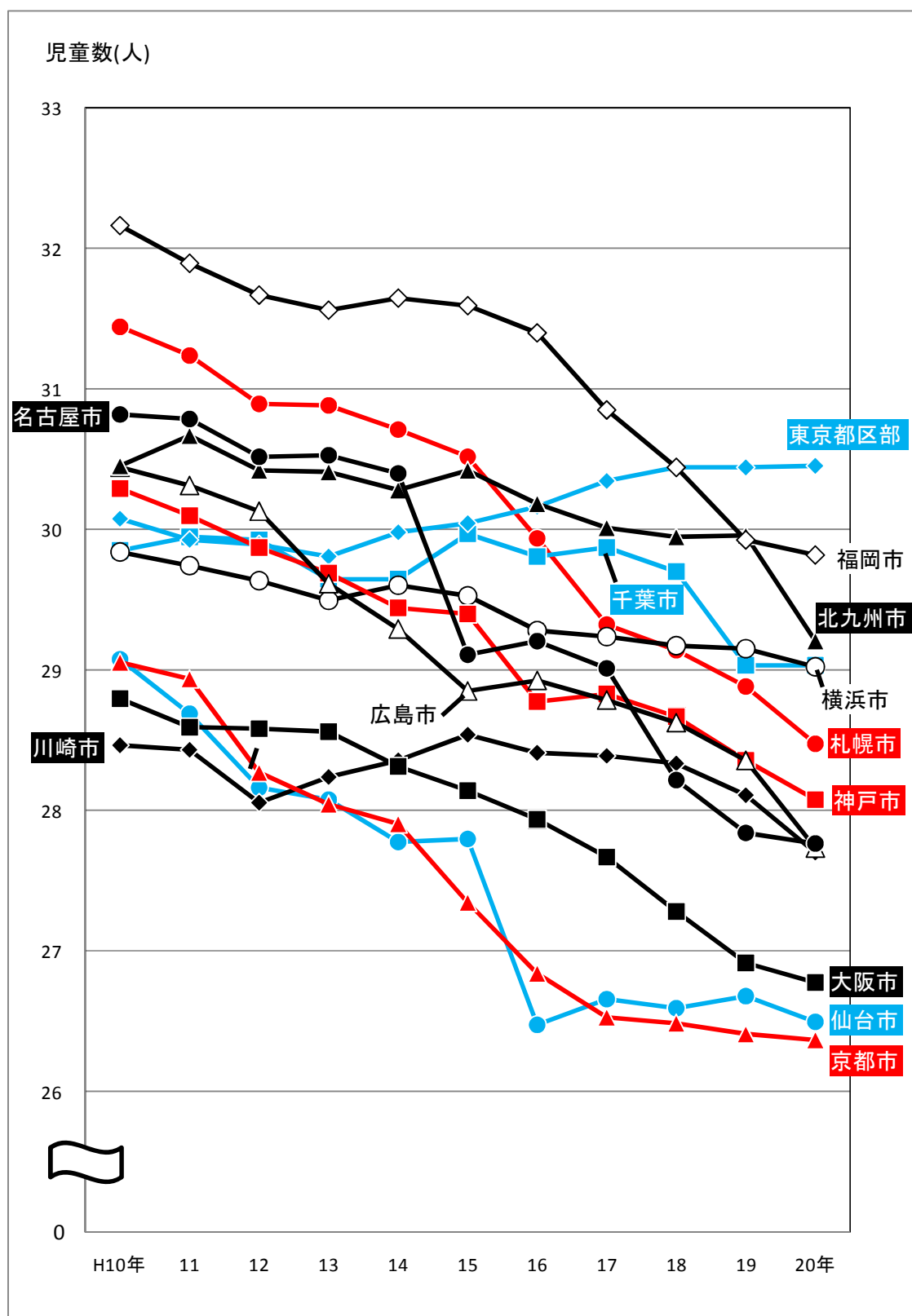
表3 小学校の1学級当たり児童数

1学級当たり児童数(人)											
都市名	平成10年	11年	12年	13年	14年	15年	16年	17年	18年	19年	20年
札幌市	31.4	31.2	30.9	30.9	30.7	30.5	29.9	29.3	29.1	28.9	28.5
仙台市	29.1	28.7	28.2	28.1	27.8	27.8	26.5	26.7	26.6	26.7	26.5
千葉市	29.9	30.0	29.9	29.6	29.6	30.0	29.8	29.9	29.7	29.0	29.0
東京都区部	30.1	29.9	29.9	29.8	30.0	30.0	30.2	30.3	30.4	30.4	30.5
横浜市	29.8	29.7	29.6	29.5	29.6	29.5	29.3	29.2	29.2	29.2	29.0
川崎市	28.5	28.4	28.1	28.2	28.4	28.5	28.4	28.4	28.3	28.1	27.7
名古屋市	30.8	30.8	30.5	30.5	30.4	29.1	29.2	29.0	28.2	27.8	27.8
京都市	29.1	28.9	28.3	28.0	27.9	27.4	26.8	26.5	26.5	26.4	26.4
大阪市	28.8	28.6	28.6	28.6	28.3	28.1	27.9	27.7	27.3	26.9	26.8
神戸市	30.3	30.1	29.9	29.7	29.4	29.4	28.8	28.8	28.7	28.4	28.1
広島市	30.4	30.3	30.1	29.6	29.3	28.9	28.9	28.8	28.6	28.4	27.7
北九州市	30.5	30.7	30.4	30.4	30.3	30.4	30.2	30.0	29.9	30.0	29.2
福岡市	32.2	31.9	31.7	31.6	31.6	31.6	31.4	30.9	30.4	29.9	29.8
1学級当たり児童数の増減数(人)											
都市名	平成10 ～20年	対前年									
		平成11年	12年	13年	14年	15年	16年	17年	18年	19年	20年
札幌市	▲3.0	▲0.2	▲0.3	▲0.0	▲0.2	▲0.2	▲0.6	▲0.6	▲0.2	▲0.3	▲0.4
仙台市	▲2.6	▲0.4	▲0.5	▲0.1	▲0.3	0.0	▲1.3	0.2	▲0.1	0.1	▲0.2
千葉市	▲0.8	0.1	▲0.0	▲0.3	0.0	0.3	▲0.2	0.1	▲0.2	▲0.7	▲0.0
東京都区部	0.4	▲0.2	▲0.0	▲0.1	0.2	0.1	0.1	0.2	0.1	▲0.0	0.0
横浜市	▲0.8	▲0.1	▲0.1	▲0.1	0.1	▲0.1	▲0.3	▲0.0	▲0.1	▲0.0	▲0.1
川崎市	▲0.8	▲0.0	▲0.4	0.2	0.1	0.2	▲0.1	▲0.0	▲0.1	▲0.2	▲0.4
名古屋市	▲3.1	▲0.0	▲0.3	0.0	▲0.1	▲1.3	0.1	▲0.2	▲0.8	▲0.4	▲0.1
京都市	▲2.7	▲0.1	▲0.7	▲0.2	▲0.1	▲0.6	▲0.5	▲0.3	▲0.0	▲0.1	▲0.0
大阪市	▲2.0	▲0.2	▲0.0	▲0.0	▲0.2	▲0.2	▲0.2	▲0.3	▲0.4	▲0.4	▲0.1
神戸市	▲2.2	▲0.2	▲0.2	▲0.2	▲0.3	▲0.0	▲0.6	0.1	▲0.2	▲0.3	▲0.3
広島市	▲2.7	▲0.1	▲0.2	▲0.5	▲0.3	▲0.4	0.1	▲0.1	▲0.2	▲0.3	▲0.6
北九州市	▲1.3	0.2	▲0.2	▲0.0	▲0.1	0.1	▲0.2	▲0.2	▲0.1	0.0	▲0.8
福岡市	▲2.3	▲0.3	▲0.2	▲0.1	0.1	▲0.1	▲0.2	▲0.5	▲0.4	▲0.5	▲0.1

(注) 1学級当たりの人数及び増減数については、別々に端数処理をしているため、双方の差が一致しない場合がある。

また、端数処理後の増減数が「0.0」の場合で、原数値がマイナスの場合は「▲」を付している。

図4 小学校の1学級当たり児童数



(3) 中学校の1学級当たり生徒数の13大都市比較

平成10年からの10年間では京都市、仙台市の減少度が大きい

平成20年の小学校の1学級当たりの児童数を13大都市で比較すると、最も少ないのは京都市の29.0人、次いで仙台市の29.8人、川崎市の31.1人となっている。一方最も多いのは福岡市で33.9人、次いで本市と東京都区部が33.8人となっている。

平成10年以降の推移をみると、10年前と比べ、全ての都市で減少している。特に仙台市及び京都市では10年連続で減少している他、10年間の推移でも当該2都市のみが4人以上の減少となっており、かつ20年の数値でも、この2都市のみ20人台となっている。(表4、図5)

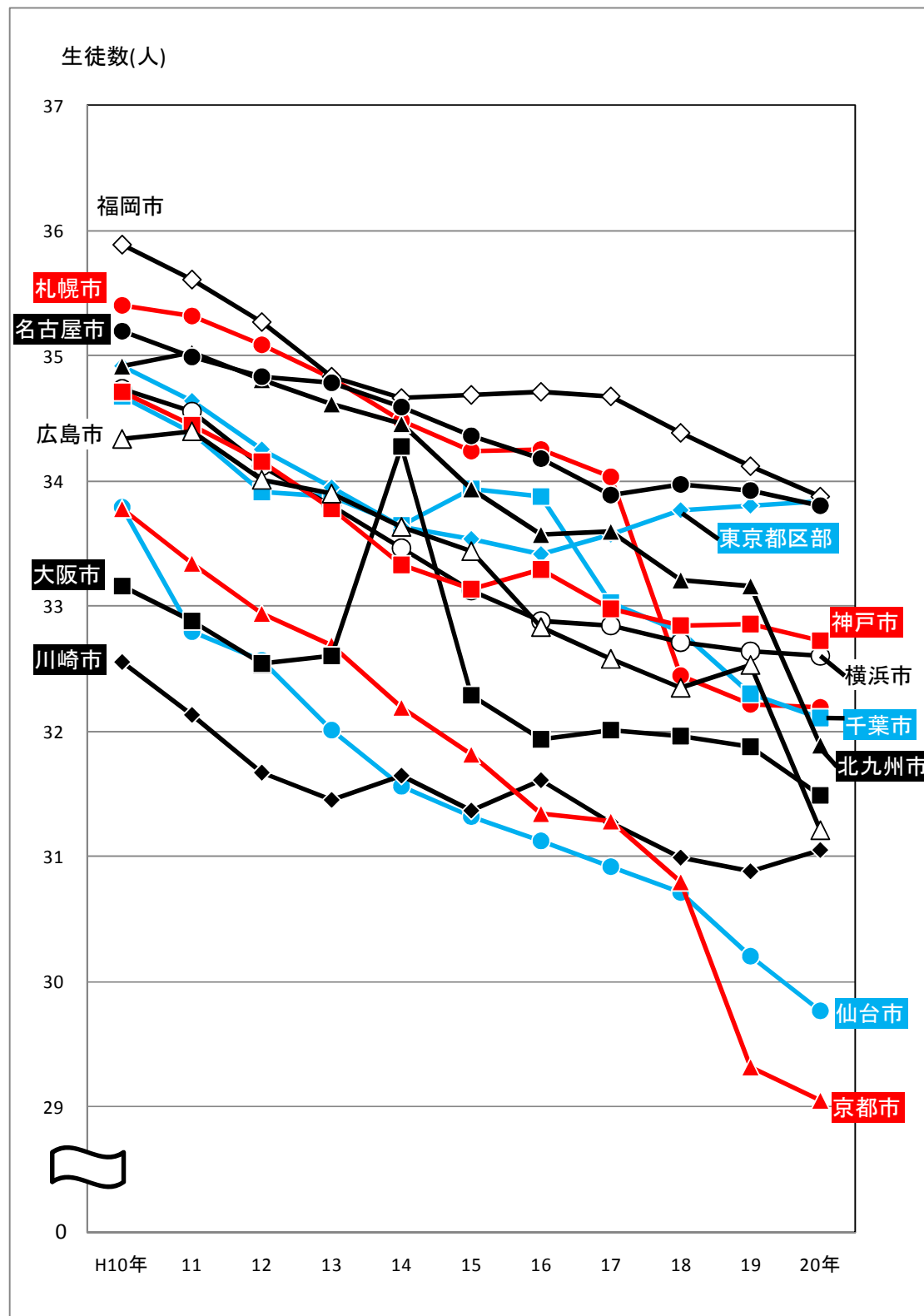
表4 中学校の1学級当たり生徒数

1学級当たり生徒数(人)											
都市名	平成10年	11年	12年	13年	14年	15年	16年	17年	18年	19年	20年
札幌市	35.4	35.3	35.1	34.8	34.5	34.2	34.2	34.0	32.4	32.2	32.2
仙台市	33.8	32.8	32.6	32.0	31.6	31.3	31.1	30.9	30.7	30.2	29.8
千葉市	34.7	34.4	33.9	33.9	33.6	33.9	33.9	33.0	32.8	32.3	32.1
東京都区部	34.9	34.6	34.2	34.0	33.6	33.5	33.4	33.6	33.8	33.8	33.8
横浜市	34.7	34.6	34.1	33.8	33.5	33.1	32.9	32.8	32.7	32.6	32.6
川崎市	32.6	32.1	31.7	31.4	31.6	31.4	31.6	31.3	31.0	30.9	31.1
名古屋市	35.2	35.0	34.8	34.8	34.6	34.4	34.2	33.9	34.0	33.9	33.8
京都市	33.8	33.3	32.9	32.7	32.2	31.8	31.3	31.3	30.8	29.3	29.0
大阪市	33.2	32.9	32.5	32.6	34.3	32.3	31.9	32.0	32.0	31.9	31.5
神戸市	34.7	34.4	34.2	33.8	33.3	33.1	33.3	33.0	32.8	32.9	32.7
広島市	34.3	34.4	34.0	33.9	33.6	33.4	32.8	32.6	32.3	32.5	31.2
北九州市	34.9	35.0	34.8	34.6	34.5	33.9	33.6	33.6	33.2	33.2	31.9
福岡市	35.9	35.6	35.3	34.8	34.7	34.7	34.7	34.7	34.4	34.1	33.9
1学級当たり生徒数の増減数(人)											
都市名	平成10 ～20年	対前年									
		平成11年	12年	13年	14年	15年	16年	17年	18年	19年	20年
札幌市	▲ 3.2	▲ 0.1	▲ 0.2	▲ 0.3	▲ 0.3	▲ 0.2	0.0	▲ 0.2	▲ 1.6	▲ 0.2	▲ 0.0
仙台市	▲ 4.0	▲ 1.0	▲ 0.2	▲ 0.6	▲ 0.5	▲ 0.2	▲ 0.2	▲ 0.2	▲ 0.2	▲ 0.5	▲ 0.4
千葉市	▲ 2.6	▲ 0.3	▲ 0.5	▲ 0.0	▲ 0.2	0.3	▲ 0.1	▲ 0.8	▲ 0.2	▲ 0.5	▲ 0.2
東京都区部	▲ 1.1	▲ 0.3	▲ 0.4	▲ 0.3	▲ 0.3	▲ 0.1	▲ 0.1	0.2	0.2	0.0	0.0
横浜市	▲ 2.1	▲ 0.2	▲ 0.4	▲ 0.3	▲ 0.3	▲ 0.3	▲ 0.2	▲ 0.0	▲ 0.1	▲ 0.1	▲ 0.0
川崎市	▲ 1.5	▲ 0.4	▲ 0.5	▲ 0.2	0.2	▲ 0.3	0.2	▲ 0.3	▲ 0.3	▲ 0.1	0.2
名古屋市	▲ 1.4	▲ 0.2	▲ 0.2	▲ 0.0	▲ 0.2	▲ 0.2	▲ 0.2	▲ 0.3	0.1	▲ 0.1	▲ 0.1
京都市	▲ 4.7	▲ 0.4	▲ 0.4	▲ 0.3	▲ 0.5	▲ 0.4	▲ 0.5	▲ 0.1	▲ 0.5	▲ 1.5	▲ 0.3
大阪市	▲ 1.7	▲ 0.3	▲ 0.3	0.1	1.7	▲ 2.0	▲ 0.3	0.1	▲ 0.0	▲ 0.1	▲ 0.4
神戸市	▲ 2.0	▲ 0.3	▲ 0.3	▲ 0.4	▲ 0.5	▲ 0.2	0.2	▲ 0.3	▲ 0.1	0.0	▲ 0.1
広島市	▲ 3.1	0.1	▲ 0.4	▲ 0.1	▲ 0.3	▲ 0.2	▲ 0.6	▲ 0.3	▲ 0.2	0.2	▲ 1.3
北九州市	▲ 3.0	0.1	▲ 0.2	▲ 0.2	▲ 0.2	▲ 0.5	▲ 0.4	0.0	▲ 0.4	▲ 0.0	▲ 1.3
福岡市	▲ 2.0	▲ 0.3	▲ 0.3	▲ 0.4	▲ 0.2	0.0	0.0	▲ 0.0	▲ 0.3	▲ 0.3	▲ 0.2

(注) 1学級当たりの人数及び増減数については、別々に端数処理をしているため、双方の差が一致しない場合がある。

また、端数処理後の増減数が「0.0」の場合で、原数値がマイナスの場合は「▲」を付している。

図5 中学校の1学級当たり生徒数



3. 私立校の生徒数（中学生及び高等学校生）

(1) 本市の私立中学生の推移

中学生の私立生徒比率は平成に入ってから以降上昇傾向が続く

本市の中学生のうち、私立校へ通う生徒の比率の推移をみると、昭和 47 年以降の昭和後期には、国公立校の生徒数が増加する一方で、私立校の生徒数は 56 年頃まで減少した後、しばらく横ばい状態が続き、私立生徒比率は約 6%前後で推移していた。

平成年代に入ると、国公立校の生徒数が減少傾向を示す中で、私立校の生徒数は平成 5 年頃にかけて昭和 47 年の 94%程度まで増加した後、平成 14 年頃までは小幅な動きが続いていたが、その後増加傾向となり、17 年に 100%を超え、20 年では昭和 47 年の約 110%となっている。

(表 5、図 6)

図 6 中学校の設置者別生徒数等

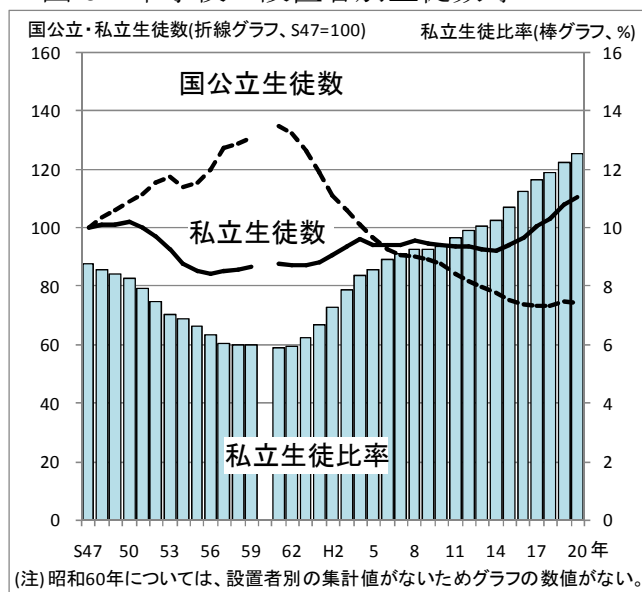


表 5 中学校の設置者別生徒数等

年	国公立	私立	私立生徒比率
	平成47年=100		
昭和47年	100.0	100.0	8.8
48年	103.6	100.9	8.6
49年	105.7	101.0	8.4
50年	108.9	102.1	8.3
51年	111.4	99.9	7.9
52年	115.5	96.8	7.5
53年	117.4	92.4	7.0
54年	113.9	87.7	6.9
55年	115.6	85.2	6.6
56年	119.7	84.0	6.3
57年	127.5	85.1	6.0
58年	128.8	85.5	6.0
59年	130.6	86.5	6.0
60年	データなし		
61年	134.7	87.7	5.9
62年	132.3	87.1	6.0
63年	126.2	87.2	6.2
平成元年	118.6	88.1	6.7
2年	111.0	90.5	7.3
3年	105.8	93.7	7.9
4年	100.8	95.8	8.4
5年	96.7	93.9	8.5
6年	92.6	94.0	8.9
7年	90.4	93.9	9.1
8年	89.8	95.3	9.3
9年	89.2	94.5	9.2
10年	87.6	94.0	9.4
11年	84.3	93.4	9.6
12年	81.9	93.5	9.9
13年	79.8	92.8	10.1
14年	77.7	92.1	10.2
15年	75.2	93.8	10.7
16年	73.5	96.5	11.2
17年	73.4	100.5	11.6
18年	73.4	102.9	11.9
19年	74.5	107.9	12.2
20年	74.1	110.3	12.5



(2) 本市の私立高校生の推移

高等学校生の私立生徒比率は平成 16 年以降 50%以上を維持

本市の高等学校生のうち、私立校へ通う生徒の比率の推移をみると、国公立校の生徒数が、昭和 47 年以降平成元年にかけて上昇する一方、私立校の生徒数は昭和 47 年の生徒数をほぼ維持してきたが、平成 2 年から国公立校とともに減少が始まった。

表 6 高等学校の設置者別生徒数等

その後、国公立校の生徒数は平成 12 年頃若干持ち直しを見せたが、私立校の生徒数は減少を続け、13 年の私立生徒比率は 50%を割り込んだ。

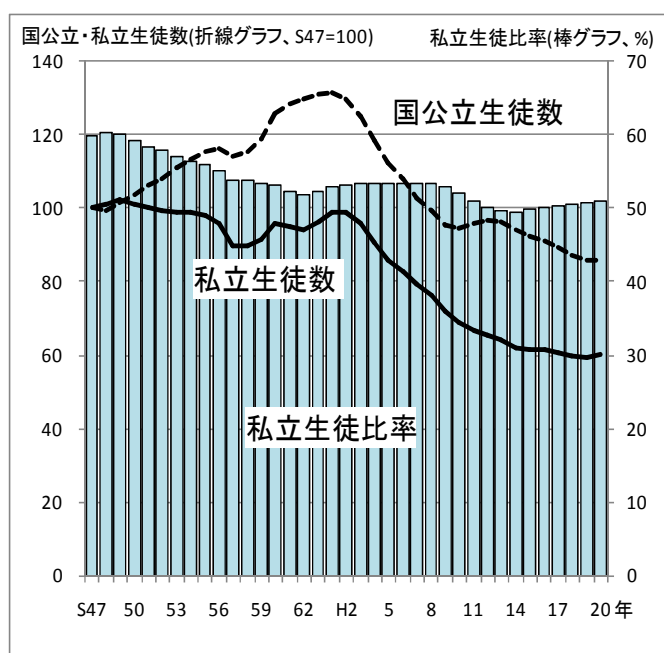
しかし、16 年頃からは、国公立校の学生数の減少度が、私立校のそれを上回るようになり、私立生徒比率は 50%以上を維持している。

また、20 年は国公立校については平成 12 年以来 8 年ぶりに、私立校については平成元年以来 19 年ぶりに生徒数が前年を上回った。

(表 6、図 7)

年	国公立 平成47年=100	私立 平成47年=100	私立生 徒比率
昭和47年	100.0	100.0	59.7
48年	99.1	101.0	60.2
49年	101.2	102.3	60.0
50年	103.6	101.1	59.1
51年	106.1	100.2	58.3
52年	107.8	99.4	57.8
53年	110.8	98.9	57.0
54年	113.0	98.5	56.4
55年	115.1	98.0	55.8
56年	116.0	95.8	55.0
57年	113.9	89.5	53.8
58年	115.1	89.8	53.6
59年	118.7	91.6	53.4
60年	125.6	95.8	53.1
61年	128.4	94.7	52.2
62年	129.6	93.8	51.8
63年	131.0	96.2	52.1
平成元年	131.5	99.0	52.7
2年	129.7	98.6	53.0
3年	124.9	95.8	53.2
4年	118.4	90.7	53.2
5年	112.1	85.9	53.2
6年	107.7	82.5	53.2
7年	102.8	79.1	53.3
8年	99.2	76.3	53.3
9年	95.5	71.9	52.8
10年	94.2	68.7	52.0
11年	95.6	66.8	50.9
12年	96.5	65.3	50.1
13年	96.0	63.9	49.7
14年	94.0	61.9	49.4
15年	92.4	61.6	49.7
16年	91.0	61.4	50.0
17年	89.1	60.5	50.2
18年	87.1	59.8	50.4
19年	85.6	59.4	50.7
20年	85.9	60.2	51.0

図 7 高等学校の設置者別生徒数等



(3) 中学生・高等学校生の私立校の生徒の比率の13大都市比較

本市の高等学校生の私立生徒比率は13大都市中3番目

平成20年の中学生・高等学校生の私立生徒比率を13大都市で比較すると、最も比率が高いのは、中学生・高等学校生とも東京都区部で、中学生でも3割以上、高等学校生では6割以上となっている。一方、千葉市は中学生・高等学校生とも全国の比率を下回っている。

本市の私立生徒比率は、中学生では8番目、高等学校生では3番目に高い比率となっている。(表7、図8)

表7 図8 中学生・高等学校生の私立校生徒の比率等(平成20年)

地域別	中 学 生				高 等 学 校 生			
	総数(人)	う ち 私 立			総数(人)	う ち 私 立		
		生徒数(人)	比率(%)	順位		生徒数(人)	比率(%)	順位
全 国	3,592,406	257,102	7.2	—	3,366,460	1,003,822	29.8	—
13大都市計	731,121	130,882	17.9	—	751,151	363,767	48.4	—
札幌市	49,441	2,025	4.1	13	48,555	15,103	31.1	11
仙台市	28,274	1,467	5.2	12	32,346	15,077	46.6	5
千葉市	24,595	1,348	5.5	11	26,091	6,455	24.7	13
東京都区部	198,947	64,208	32.3	1	217,349	133,951	61.6	1
横浜市	90,746	15,340	16.9	3	74,897	31,173	41.6	8
川崎市	30,119	3,838	12.7	7	21,577	6,336	29.4	12
名古屋市	60,808	7,615	12.5	8	65,238	33,240	51.0	3
京都市	39,035	7,611	19.5	2	42,512	20,945	49.3	4
大阪市	66,153	10,020	15.1	5	77,528	34,239	44.2	7
神戸市	42,121	5,895	14.0	6	41,896	18,998	45.3	6
広島市	35,140	5,630	16.0	4	32,456	13,046	40.2	10
北九州市	26,818	1,927	7.2	10	27,887	11,596	41.6	9
福岡市	38,924	3,958	10.2	9	42,819	23,608	55.1	2

